

## ヘボン博士の生い立ち

ジェームズ・カーチス・ヘップバーン（ヘボン）は、1815年3月13日にミルトンの町に誕生しました。

少年時代に、近くのお母さんが先生をしていたミルトンアカデミー（カークパトリックアカデミー）に通い、教育を受けました。同じころ、やがてペンシルバニア州知事になったジェームズ・ポラック氏もそこに通いました。ポラック氏は、1840年代の後半に連邦議会の下院議員を三期務め、ワシントンに滞在中に下宿していた時、やはり、新下院議員のアブラハム・リンカーンも同じ家で下宿していました。そして、ペンシルバニア州知事を務めた後、リンカーン大統領にペンシルバニアの造幣局長に任命され、当時の財務長官より、硬貨に刻む「神への国民の信仰」をモットーにした言葉を考案せよとの指示を受け、結局、財務長官の手が、少し加えられた後、今までの流通貨幣に刻まれている「In God We Trust」の言葉が、誕生しました。ポラック氏も敬虔なクリスチャンで、恐らく上記のアカデミーも、キリスト教建学精神に基づいて運営されていただろうと、推測する事は、難しい事ではありません。

ヘボン博士は、16歳にして長老派のプリンストン大学の三年生として入学し、そこで化学と古典（ラテン語、ギリシャ語など）を専攻しました。どう大学を卒業後、ペンシルバニア州立大学医学科に進み、21歳で1836年に卒業しました。

翌年、故郷のミルトン町で第一長老教会に所属してから、宣教医としての考えが、固まってきました。父親の反対を受けながらも、その希望は消えずに、心に灯り続けていました。1838年にペンシルバニア州ノーリスタウンで開業医となり、そこで生涯の伴侶となるクララ・M・リートに出会いました。彼女は、従兄弟が校長をしていたノーリスタウンアカデミーで先生をしていました。彼女も宣教の夢を持っていて、1840年の10月に、二人が結婚することで、その夢も共有することになりました。丁度この頃は、第二次大覚醒と呼ばれるリバイバル運動が、1700年代の終わりごろから、1800年代中頃まで、北東部を中心に続いていた時でした。

二人は、近代医学や福音を知らない中国に狙いを定め、結婚後、長老教会宣教会の支援を受けて、同月にボストン港から中国に向かって遠回りの旅に出たのです。捕鯨船ポトマック号に乗って、二か月経ったときに、クララ夫人は、流産してしまいました。中国に入る訓練を受ける為に、多くの宣教師達が立ち寄ったシャム（タイ）が本来の目的地でしたが、シンガポールまでしか連れて行ってもらえませんでした。わずかな期間だけマカオにいましたが、それ以外は、二年間シンガポールに留まりました。そこで息子が生まれましたが、間もなく死亡しました。

アモイでの宣教医療所の募集があり、二人はすぐに承諾し、現地に向かいました。しかし、そこは蚊が、繁殖していて、二人も、もれなくマラリアに罹ってしまいました。それで、又治療のために、マカオに戻らざるを得なくなったのです。アモイに戻っても、クララ夫人は、元の健康を取り戻せず、1845年11月に宣教を断念せざるを得なくなり、夫妻は、翌年3月にニューヨークに戻りました。その時は、アモイで生まれた唯一の生存者の息子サミュエルが同行しての帰国でした。

1859年までの13年間、ヘボン夫妻は、ニューヨークに留まり、中国での治療経験から、当時市内で流行したアジア系のコレラ病を的確に検診し、治療したために、市内では有名な医者になりました。その間、三人の子供ができて、猩紅熱や赤痢などに罹って、死亡しました。その様な悲劇を通して、又アジアでの宣教に戻る情熱を高めたのです。

そして、1853年のペリーの浦賀来航と、それに続く両国の信教の自由を尊重することを含む日米通商条約の締結と共に、日本宣教の道が開け、ペリーに同行したS. W. ウィリアムは、アメリカ長老派教会、オランダ改革教会、聖公会各本部へ文書を送り、まず宣教医を送ることを要請しました。これにすぐ応じたのが、ヘボン夫妻でした。170日の旅を続けて、1859年10月18日に神奈川（現横浜）に到着しました。

アメリカ領事館の隣のお寺を館として、日本在住が、開始されました。そこで、間もなく以前にシンガポールで出会った生涯の友オランダ改革教会のS. R. ブラウンが、住むようになりました。そして、ジェームズ・バラも加わりました。

現在のような法治国家ではない時で、危険が付きまとい、実際夫婦は、一度見知らぬ者に後ろから襲われ、ヘボン博士は、無傷でしたが、クララ夫人は怪我を負ってしまいました。しかし、国際的事件に発展して、宣教に支障が生じないように、二人は、この事件を公にしませんでした。

1861年から横浜の居留地に施療所を開設し、18年の間、おおよそ1万人ほどの患者を治療したと言われています。治療代を受け取らず、どうしてもという患者からのみ治療代を受け取りました。そして、1863年の秋に、明治学院大学の出発点となるヘボン塾を同地に開設しました。

来日以来、七年目にして和英辞典「和英語林集成」を編纂し、2万語を含む同辞典は、1867年に横浜にて出版されました。更に、新約聖書の日本語訳にもブラウン氏と共に早いうちから手掛けていました。1874年にはブラウン邸で旧約聖書の日本語訳委員会の委員長に任命され、その他の宣教師たちと旧約聖書の日本語訳にも着手し、1887年に完成しました。

ヘボン博士は、和英辞典の第3版の出版権の売却料としての\$2,000を全部明治学院に寄付し、ヘボン館が建設されました。そして、1889年から1891年まで学院長を務めました。

1892年には、横浜に指路教会を設立し、33年の宣教を終えて、同年の10月に夫妻は帰国しました。奇しくも、1911年9月21日に享年96歳でヘボンが他界した日に、ヘボン館が焼失しました。妻のクララは、それに先立って、1906年3月4日に他界しました。現在夫妻は、ニュージャージー州イーストオレンジ市の墓地に眠っています。

文責 一条吉広 (1973年英文科卒)

注：ヘボン博士の生い立ちの文献は、David J. Luの著作 (James Curtis Hepburn) で、それをかなり要約したものです。博士が、ブラウン氏に出会ったのは、シンガポールとマカオという二説があることに気づきましたが、どちらが正しいかまで、調査する時間が、ありませんでした。